

第3号

2008年
3月30日

梅花女子大学 児童文学・絵本センター報



編集・発行 梅花女子大学児童文学・絵本センター

〒567-8578 大阪府茨木市宿久庄2-19-5

<http://www.baika.ac.jp/~ehoncenter/index.html>

事務局 田中裕之研究室 tel 072-643-6221 fax 072-643-7997 e-mail: tanakah@baika.ac.jp

こころを通わせる

センター運営委員 加藤 康子

直接向き合い、体を寄せ、絵本を声に出して共に読むこと、おはなしを語り聞くこと。ここに、親と子、おとなと子どもの間でこころの触れ合いが実現する可能性がある。学生が子どもたちに絵本を読み語るとき、子どもたちは、新しい出会いの喜びを感じ、学生は子どもたちの目の輝きに勇気をもらい、さらに意欲がわき上がってくる機会となる。人と人が、直に出会って触れ合い、ことばを交わし、こころを結ぶことの重要性が、切に求められている現代。それを可能にするのが、〈絵本〉であり、〈童話〉や〈昔話〉といった物語、そして〈童謡〉や〈わらべうた〉だ。

直接伝え合うだけでなく、作品を創り、それを読むことにもこころの触れ合いはある。2月の絵本制作展に高校生が授業の一環として来場した。大学生が創った作品を高校生が夢中で読み、作者と読者の間に通い合うものがあつた。

「こころを通わせる」とは、互いが思い描くこと、感じること、考えることに思いを馳せて、理解し合おうとすることである。双方が歩み合い、仲立ちとなるものがなければ行き違うことになる。児童文学・絵本は仲立ちになるばかりでなく、「こころを通わせる」ことを描いている。児童文学・絵本センターの3年目は、〈創作〉、〈伝達〉の実践的活動を実施し、さらに〈研究〉への支援をめざし、「こころを通わせる」ことを模索している。

速報

山下三恵さん、大賞受賞！

児童文学科卒業生、山下三恵さん（ペンネーム宮下 恵菜）が「第15回小川未明文学賞」大賞を受賞しました。昨年には、受賞作品『ジジ きみと歩いた』（学習研究社）で作家デビューし、今年3月には2作目『うわさの雨少年（レインボーイ）』（ポプラ社）を発行。期待の新人作家として大注目されています。



絵本制作展

絵本制作展の実行委員になるのは初めてで、額装から展示まで色々な作業をしたのは、貴重な経験だった。少々不安な気持ちもあったが、展示会場の受付の仕事をして、来館されるお客様が、私たちが頑張って創作した作品をじっくり丁寧に見て頂いているのを見ると、不安だった気持ちも解消されていた。

実際、自分の作品をお客様が手に取って読んでおられる光景を見ると、卒業制作を頑張って作って本当に良かったと思った。来館されたお客様のほとんどが、学生たちの愛情のこもった作品を読んで、暖かい気持ちで帰られたと私は思う。そう思えるほど、今年も素晴らしい絵本制作展になった。(4年 野村梨花子)

梅花おはなし会

2007年度は、茨木市内の豊川・水尾小学校と茨木市耳原にある子育て広場「ふくろう広場」などで活動しました。小学校では学年に応じた選書を特に心掛けました。読み手である学生スタッフと聞き手である子どもたちがお話の世界を共有し、毎回充実した読みあいのひとときでした。「ふくろう広場」では、未就園児とお母さんたちと一緒に歌遊び、人形劇、赤ちゃん絵本の読みあいと紹介を行いました。幼い子どもたちもお話の世界にみるみる引き込まれ、集中して聞いてくれたことに驚きました。これからも絵本と子どもと大人とをつなぐ存在でありた

いと思っています。1年生、2年生のスタッフを増やし、スキルやメンバー間の意識を高めていくことが今後の課題です。(3年 河上愛子)



第5回「子どもの本フェスティバル in 大阪」の「梅花おはなしルーム」

秋の恒例イベント「第五回子どもの本フェスティバル in おおさか」に参加しました。この二日間は「誰かと絵本をよむ」ことに芯から興奮しました。今年は新たな試みとして、大勢の人が集まるギャラリーでも「おはなし会」をする機会を頂きました。賑やかな場所で絵本をよむことに戸惑いながらも『おおきなかぶ』では、絵本とごっこ遊びを通して「おおきなかぶ」の世界を共有しました。絵本によみ手ときき手が加わって、ひとつの世界が生まれる確かさが実感できた忘れられないプログラムです。絵本を持って外に出て、誰かとよむ。そんな非日常のひとときを、これからも自分の傍に置いておき

たい、ということに気づくきっかけとなりました。(4年 愛須由季子)



梅花子どもの本フェスタ' 07

今年で2回目となる「梅花子どもの本フェスタ」は、「子どもゆめ基金」の助成を受けて、12月15日と22日の2日間にわたって行われました。

第1日 (12月15日)

司書フォーラム (D 401 室)

第一部 講演 川上博幸氏

(奈良県香芝市民図書館館長)

「図書室・図書館と子ども・子どもの本」

川上先生は、大阪府枚方市に司書として就職されて以来、30年以上にわたり枚方市立図書館をはじめとする公立図書館に勤務してこられました。同時に、家庭文庫を自宅で17年間開き、図書館とは違う角度から、子どもと子どもの本の関わりを見つめ、読書講座や読書会の開催など、読書の啓発や研究活動もしてこられた方です。

当日は、こうした長年にわたる現場での実践活動に基づいた、大変興味深くまた貴重なお話をうかがうことができました

図書館と子どもの本をめぐる問題は山積していますが、司書をはじめ、子どもの本に関わるすべての大人が、子どもが本を読むことの意味と、地域社会に図書館があることの意味をしっかりと認識することが、すべての子どもに読む喜びを体験させることにつながるのだということを実感させられたひとときでした。



第二部 シンポジウム

「司書という仕事 ～現場からのメッセージ～」

司会：鈴木穂波氏、パネリスト：小野綾子氏、秋山玲子氏、北野舞氏、山本美千枝氏、アドバイザー：川上博幸氏

シンポジウムでは、現在、梅花女子大学大学院博士後期課程生であるとともに大阪国際児童文学館に勤めており、公立中学校での司書経験もある鈴木穂波氏を司会進行役に、4名の梅花の卒業生および現役大学院生が、自身の公立図書館や小・中学校での司書・司書教諭としての実体験を踏まえた、さまざまな報告をしてくださいました。司書としてのやりがいと悩みが、ビデオや、自身が作ったリーフレットなどを示しながら具体的に語られて、あっという間に時間が過ぎてしまい、十分にディスカッションができなくなるほどでした。聴いていた学生たちにとって、司書になりたいという意欲を掻き立てられる貴重な機会となったに違いありません。次回はもっと多くの参加者があるよう、学内外へのより一層の広報の充実が望まれます。

(鵜野祐介)

第2日 (12月22日)

もり・けん ハーモニカ・コンサート 日本の童謡・アジアの愛唱歌

(澤山記念館チャペル)

もり・けんさんの梅花でのコンサートは、2006年の秋に続いて今回が2回目で、クリスマスシーズンにチャペルで行うことを意識したプログラムが組まれました。ペンダントにもなるような長さ5センチ少々ミニサイズを含めて何本も用意された大きさと音色の異なるハーモニカを使って、「超絶技巧」を駆使した曲から、みんなが口ずさめる日本の童謡まで、トークを交えながら演奏してくださいました。

最後はクリスマス・キャロルを全員で合唱し、冷たい雨の降りしきるあいにくの天候の中、来場して下さった観客の方々ひとりひとりの心が温まるコンサートになりました。(鵜野祐介)



梅花おはなし便 クリスマスおはなし会 (学生会館1F)

児童文学・絵本センターの「梅花おはなし便」学生スタッフが、本フェスタのためのスペシャルプログラム「クリスマスおはなし会」を3回公演しました。会場の学生会館1Fの一角に、この日のために日進堂書店さんが「クリスマス絵本」フェアを開催し、その隣りに用意した「おはなし」スペースで絵本の読み語りと手遊び、そしてペープサートを行いました。あいにくの雨のため、来場者が少なかったのが残念でしたが、食い入るように絵本を見つめておはなしに聞き入る子どもたちの姿が印象的でした。

(鵜野祐介)



MBSアナウンサーによる

おはなし夢ひろば in 梅花 (澤山記念館講堂)

「おはなし夢ひろば」は、MBSアナウンサーによる絵本・童話の朗読イベントで、大学での開催は今回が初めてとのこと。中心メンバーの関岡香さんは、梅花高校のご出身です。児童文学科の理念の柱の一つ「伝達」に関連して、プロの「語り」を身近に体験しようと言う意図で企画されました。

最小限の照明とBGMのみのシンプルな演出で、『100万回生きたねこ』など3冊が読まれましたが、声の強弱、高低、リズムの変化と微妙な間合いなど、聴き手のイマジネーションを色彩豊かにかきたてる「語り」は奥深い表現力を持ち、絵本を読む意味と魅力を改めて認識させてくれました。(香曾我部秀幸)



松野正子氏 セミナー

作家・翻訳家そして司書や文庫活動の研究・教育に長年携わってこられた松野正子先生に、2007年7月7日、2008年1月23日の2回、絵本の読み語りのセミナーをしていただきました。子どもには物語を全身で味わう力があり、子どもが子どもの本を楽しむことは良いことだ。では、子どもと共に子どもの本を楽しむにはどうすればいいのか。その基本を、実際に絵本を読みながら語っていただきました。1回目

には司書をめざす30名ほどが、2回目は「文庫活動の理論と実習2」「児童心理学」の受講生80名ほどが参加。子どもの本、特に絵本の持つ力とそれを伝えることの意味をかみしめました。なお、本セミナーは独立行政法人日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業の「領域Ⅳ. 豊かな人間像の獲得」の「伝承の現場からの考察」プロジェクト(略称「人社プロ」)の支援を受けました。(加藤康子)

スズキコージ ワークショップ

9月29日に行われた「スズキコージ ワークショップ」に、私は絵本作展実行委員として会場準備の段階から参加しました。広く開けた会場に、大量のダンボールや絵具やブルーシート、そしてコージさん本人直筆の巨大なろうけつ染めが飾り付けられると、会場の空気がガラリと変わり、いよいよ期待が高まりました。そして、絵本と同様に少し変わった雰囲気を持つコージさん本人が現れて、世界に一つしかないお面作りが始まりました。ダンボールを切り貼りして、個人が思い思いに自分のお面を作っていきます。周りを見渡せば、みんな楽しそう

に、そして真剣にお面の制作に没頭していました。私も委員であることをすっかり忘れて、夢中でした。あっという間に2時間近くが経ち、気がつくと、色とりどりのお面が会場に溢れていました。そんなお面を全員がかぶり、コージさんを先頭に、楽器を鳴らして学内を練り歩く様子は、異様な光景だったかもしれませんが、パレードに参加した私たちは、スズキコージワールドにどっぷり浸かり、大いに楽しむことが出来ました。あの夢のような熱気は今も忘れられません。(3年森 悠子)

ストーリーテリング コンサート

英国スコットランドを代表するストーリーテラー、デイビット・キャンベルさんの2週間にわたる全国ツアー中、大阪における唯一のコンサートを本学で開催できたことは大変光栄なことでした。キャンベルさんはユーモアと情熱にあふれる語りで観客を魅了し、また今回のツアーに同行された日本人女性、美緒・シャプリーさんのハープ演奏が典雅な彩りで会場を包み込みました。今年(2008年)9月に、ヨーロッパ児童文学研修に行く学生たちと一緒に、エディンバラで2人と再会できるのが今から楽しみです。(鵜野祐介)



2008 年度 活動計画

<児童文学・絵本センターの基本理念>

- A. 学生や卒業生、そして一般市民の方々が児童文学や絵本の研究・創作・伝達について主体的・継続的に学んでいくことをサポートする。[学習支援]
- B. 学生や卒業生が、児童文学や絵本を通して地元・近隣地域の子どもや一般市民の方々と交流する場を設けることにより、「心の架け橋」としての児童文学の今日的意義と重要性を地域社会にアピールする。[交流]
- C. 地域住民との交流を児童文学や絵本の伝達に関する実践研究に生かす。[実践研究]
- D. 児童文学・絵本に関する情報交換・発信のステーションとなる。[情報ネットワーク]

<運営組織・担当者（予定）>（敬称略）

- ・センター長：横山充男
- ・運営委員：香曾我部秀幸、加藤康子、鶴野祐介、田中裕之（事務局幹事）
- ・事務局補佐：氷室真理子、手嶋洋美
- ・学生スタッフ、卒業生スタッフ（ともに登録制）

<活動計画>

- ①小学校での「おはなし会」の実施（前期のみ。後期は授業）
- ②オープンキャンパス他における「絵本制作展」開催
- ③「梅花子どもの本フェスタ 08」の開催（2008年6月の予定）
- ④「梅花おはなし便」の公演
- ⑤セミナーの開催：絵本の読み語り・ストーリーテリング他
- ⑥司書、童話・絵本制作に関する卒業生ネットワークの構築

学生・卒業生 スタッフ募集中！

児童文学・絵本センターでは、「梅花おはなし便」、「梅花おはなし会」、「梅花子どもの本フェスタ」等に参加するスタッフを募集しております。学生・卒業生の皆さん、是非ご応募ください。お申込はセンター事務局（田中）まで。連絡先は本紙1頁をご参照ください。



今年度から始まった「文庫活動の理論と実習2」という授業を、2名の教員で担当している。長い実績を持つ「実習1」は梅花幼稚園での文庫活動。この「実習2」は、近隣の小学校へ出向いての読み語り活動が中心である。

学生たちは、対象学年と季節や時期を念頭に、絵本を選び、約30分の構成を考え、何度も練習し、出かけていく。本センターの活動である「おはなし便」の授業版といってもいい。私は引率し、学生たちの活動を見守るのだが、これが実に楽しい。真剣に物語に聞き入り、時に爆笑する小学生の反応のよさ。それを受けた学生のうれしそうな顔。他の授業では、なかなかこれほど多くの笑顔に出会えるものではない。何年も小学校での読み語りを続けている妻と、彼女の読み語りを聴く息子の姿を重ね合わせたりもしながら、私もまた、とても幸せな気分を満たされる。あっという間の30分。「ありがとう」「面白かったよ」、子どもたちの声に手を振って、後ろ髪を引かれながら、皆で校舎を後にする。

これまで児童文学を専門としてきたわけでは

なかった私だが、センターの活動や上のような授業に様々な形で関わることによって、児童文学や絵本の魅力と力を再確認している。センターが設立されて2年。荒井良二、スズキコージ氏を招いての絵本ワークショップをはじめ、様々な催しを企画、実行して来た。それぞれが楽しく、かつ内容の充実したものばかりであったと、運営委員の一人として自負できるが、反省点もある。センターの活動は、まだまだ学外との連携・交流が充分ではない。在校生、卒業生を中心とした活動になることは当然としても、あらゆる企画にもっと多くの高校生や一般の方々を巻き込んでいくための方策を考えなければならないだろう。児童文学や絵本の持つ、「心の架け橋」としての力は、現代の日本社会に広く必要とされているはずなのだから。



編集後記

2006年5月に開設した児童文学・絵本センターの事務局幹事を2年近く務めさせていただきました。この間、学生・卒業生のみならず、子どもから大人まで数多くの一般市民の方がたと、絵本やおはなしの面白さを共有する機会が持てたことを幸せに思います。広島県から何度も足を運んでくれ準備や片づけまで手伝ってくれた男子学生、「<伝達>に力を入れるようになってくれて本当にうれしい」と「子どもの本フェスティバル in 大阪」の会場で語ってくれた卒業生、いくつもの横顔が浮かびます。これからもセンターの活動を通して、児童文学や絵本の魅力と重要性をもっともっとアピールしていきたいと思います。4月より田中裕之先生に事務局幹事をバトンタッチします。どうもありがとうございました。(鵜野祐介)

